

05年カツオ

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数				量				加工品				
	漁獲	産地生	地冷	輸入	輸出	消費地	消費支出	消費支出	在庫	缶	削	節	生利
16	297	58.9	207.5	81.2	13.4	0.2	26.9	1,282	352	32.6	20.9	38.3	3.8
17	367	95.5	246.5	52.1	80.5	0.1	33.2	1,441	351	36.6	20.7	40.1	3.8
%	124	162	119	64	602	67	123	112	100	112	99	105	100
年	産地生	地冷	消費地生	輸入	輸出	消費支出	消費支出						
16	316	115	539	86	84.7	2,024	980						
17	190	106	405	89	94.1	2,086	965						
%	60	92	75	103	111	103	98						

漁業・資源・漁獲

日本のカツオ漁業は、千葉以南の沿岸や伊豆諸島周辺で行われている曳縄を別にすると大別し一本釣りときまき網に分けることができる。また、カツオの漁獲量の大半がこの2つの漁種により占められている現状に変化はない。

昭和39(1964)年南方竿釣り漁業が周年操業化、同45(1970)年の開発センターの調査を境にして同49(1974)年に海巻き操業の本格化がみられ、漁場は南及び東方にも拡大し、10°S以北、155°W以西の中央～西部太平洋で広範囲に形成されている。更にインド洋(現在は撤退している船も多い)、タスマニア、ニュージー海域での操業もみられるようになり、その比較的豊富な資源量と品質的安定も加わり、特に海巻物は節業界にとっては輸入物と同様、貴重な加工原料となっている。

1970年代以降増加を続けていた中西部太平洋の漁獲量は、1988年に50万トンを越え1990年代に入り、100万トン前後の漁獲で横ばい傾向であったが、1998年以降120万トン、2004年には130万トンを超え高水準を維持している。したがって、C P U E、加入量、モデル計算等により現在の資源動向は安定した状態をといわれる。但し、海巻き等によるこれ以上のカツオ漁獲は、キハダ、メバチへの漁獲圧につながる可能性があるといわれている。

インド洋の資源も、1983年の6万トンから1994年の31万トンへと急激に増加し、その後の漁獲量も25万トン前後とやや減少したが、1998年に再度31万トン、2002年には56万トンと増加しつつある。近年、漁獲の約4割をEU(スペイン、フランス)とセーシェルを中心とした巻き網、約3割を流し網(主にインドネシア、イラン、スリランカ)、約2割をモルジブの竿釣りが漁獲している。この海域の資源動向に現在特段に問題があるとはいわれていない。

ただ、従来みられなかった小型魚が卵を持っていたり、網の入れる深度が深くなったりと、多少資源の変化を表す兆候が見られているという情報もある。

現在操業が行われている中西部太平洋で主に日本、台湾、米国、韓国、PN、フィリピン、インドネシア、ソロモン、中国、その他、東部太平洋ではエクアドル、メキシコ、ベネズエラ、米国、バヌアツ(便宜置籍船)、コロンビア、スペイン、パナマ(便宜置籍船)、その他、東部大西洋ではスペイン、フランス、ベネズエラ、インド洋ではスペイン、フランス、セーシェル等のまき網や、竿釣り、流し網が操業を行っている。

しかし世界的な魚価低迷の中、漁獲努力の調整がいわれており、世界カツオ・マグロまき網機構

(WTP0)も設立されている。

また、国内供給問題では、来年度大型竿釣船の10隻程度の減船が発表されており、今後の供給不安を残している。

本年のカツオの漁獲量は、36.7万トンであった。

産地水揚量と価格

17年の産地水揚量は、34.2万トンで前年26.6万トンをかなり上回った。

内訳は、生9.6万トン、冷24.7万トン（前年：生5.9万トン、冷20.8万トン）であった。

本年の生鮮（日本近海）の漁況は、初漁期（1～4月：犬吠埼以南の本邦南岸域漁場）の釣り漁場でのサイズは相変わらず大きかったが、近年では平成13(2001)年に次いで低調に推移した。

しかし、黒潮前線を越えてから本格化する三陸・常磐沖での漁は、竿釣り、まき網とも極めて好調に推移し、近年では最も多い水揚げになった。また秋以降の「下りカツオ」・「戻りカツオ」の時期にも本年は好調に推移し、漁獲も伸びた。

海域別漁獲量は、三陸68%（前年：52%）、常磐25%（前年：28%）、南西・東海1%（前年：2%）、九州西部3%（前年：10%）九州南部3%（前年：8%）であった。

本年も漁場形成の主体はより三陸・常磐海域型であり、初漁期の不振を反映して九州地区でのシェアは減少した。

南方竿釣りのカツオ（東沖を含む）焼津						海外まき網の状況（全国）					
年次	単位		16年	17年	前年比(%)	年次	単位		16年	17年	前年比(%)
水揚隻数	隻	延	256	243	95	水揚隻数	隻	延	311	321	103
水揚量	トン	計	66,092	62,642	95	水揚量	トン		191,234	222,105	116
々	々	カツオ	47,445	49,632	105	1隻当たり	々		615	692	113
々	々	キハダ	18,647	13,010	70	水揚金額	100		20,526	23,628	115
1隻当たり	々	計	224	258	115	1隻当たり	万円		66	74	112
水揚金額	100	計	11,632	11,724	101	価格	円/kg		107	106	99
1隻当たり	万円	計	45	48	106	水揚量	トン		151,915	185,928	122
価格	円/kg	平均	176	187	106	1隻当たり	々	カツオ	488	579	119
々	々	カツオ	157	136	87	価格	円/kg		98	97	99
々	々	キハダ	224	382	171	水揚量	トン		30,516	30,207	99
						1隻当たり	々	キハダ	98	94	96
						価格	円/kg		161	170	106
						水揚量	トン	メバチ	4,678	5,517	118
						々	々	その他	4,125	454	11

冷凍カツオは、竿釣り（焼津）は南方が前年(4万2千トン)をかなり下回る2万3千トン、東沖が前年(0.8万トン)を大きく上回る2.6万トンであった。一方、本年の海巻きは、キハダ（キメジ）が前年並み、カツオ、メバチ（ダルマ）が増加であった。

竿釣りピン長は回転すし等を始めとした外食産業・居酒屋等での需要増加もあってマーケットを獲得している。本年は、夏場から秋口にかけて東沖で昨年よりは質はともかく多少良かったが、上半期の伊豆列島周辺漁場での漁獲は低調のうちに推移した。また本年は冬場に西経域で漁場が形成され、漁獲も858トンみられた。なお本年の釣トンボの水揚げは生鮮3,847トン(前年15,623トン)、冷凍13,044トン(前年16,955トン)であった。

価格は、生190円（前年316円）、冷106円（前年115円）で推移したが、生・冷ともは水揚げ大幅

増等を反映し下落した。

消費地入荷量と価格

17年の消費地入荷量（10大都市）は、生3.3万トンで前年（生2.7万トン）をかなり上回った。

本年は走りの時期から順調な入荷がみられ上、夏場から戻りカツオの時期にも大量の入荷で年間を通じて近年でも最も潤沢な入荷となった。

カツオはサンマと並んで、大衆魚の中では現在でも比較的旬がある代表的な魚でもある。しかし、近年B1製品の定着の中で市場外流通主体に「タタキ」や東沖「トロカツオ」等は周年商材として出回っている。

本年は、特に近海漁の好漁から鮮魚価格（産地、消費地とも）の下落が顕著であったことから、家計調査による消費も数量、金額とも昨年を上回った。

価格は、405円で産地水揚げの不振を反映し、前年の539円をかなり下回った。

輸出入

カツオの輸出は、原魚と缶詰に分かれるが、缶詰輸出は既に国際競争力はなく、年々少なくなっており、輸出も僅かになっている。

本年は、原魚8.1万トン（前年1.3万トン）、缶詰126トン（前年187トン）で原魚は缶詰用として国内漁の好漁を反映した結果、大幅に増えた。

輸入は平成年度に入ってから円高傾向もあって年々増加傾向がみられていた。これは節用需要の高まり（竿釣船のB1化に伴い国内の需要を満たしきれなくなった）で量、価格、品質とも安定している輸入物への依存度が高まっているためである。本年は国内漁の好調さもあり輸入量は5.2万トンで前年（8.1万トン）を下回った。

価格は、89円で前年（86円）を上回った。